

『吾輩は猫である』訓戒

Junko Higasa 2016.5.14

第九章の終わり方は面白い。何が正気で何が^{きちがい}気狂か考えて『何が何だか分らなくなった』と寝てしまった時点では正気である。翌朝考え直して考え抜いて『何が何だか分らなくなる』時もまだ正気である。しかしそれを長く繰り返せば『何が何だか分らなくなる』本物の気狂になることは確かである。

世の中の「常識」は人間が多数決で決めるものである。従って欲得多数の社会では分別ある少数派は気狂扱いされる。当世では西洋一辺倒の団体が正気で、東洋精神維持の個人が気狂という事になる。そんな催眠術をかけ続けられていると、普通の人も本当の気狂になってしまうだろう。悟りを開けず気狂になるよりは、『一夜』の蟻のように葛餅と一体化してしまうほうが楽である。しかし西洋体質を理解せぬまま日本人体質に取り入れるのは危険である。その訓戒を示したのが、葛餅になれという催眠術にからなかった浅田宗伯と苦沙弥(漱石の投影)である。

浅田宗伯は、日本で西洋の種痘を先導した医師の薫陶を受けたが、明治政府の漢方廃止に抵抗し、最期まで体質改善に寄与する漢方保存に働きかけた。

夏目漱石は、西洋化の影響で種痘(天然痘予防接種)を受け、逆に天然痘症状として残った痘痕を西洋医学の副作用見本として呈しながら英語を教えている。

文明の甘い蜜を舐めるのもよいが菓子皿の底から這い上がれなくなる蟻にならないことが肝要である。